

昭和56. 2. 21

6. 腸骨窩血腫による大腿神経麻痺の一症例

京都市立病院整形外科

武田 信巳・森 英吾

太田 和夫・浜本 肇

一坂 章・吉河 正人

真鍋整形外科

真鍋克次郎

症例は13才女子。倒立の失敗により後方へ倒れ、右股関節を過伸展されながら右殿部を強打し2時間後腸腰筋拘縮姿勢と右大腿神経麻痺を来たした。CTにて腸骨筋下に異常陰影が認められ、腸骨窩穿刺で少量の凝血塊を吸引し、腸骨窩血腫による大腿神経麻痺と診断した。2週間後、症状の軽減が認められないため手術を行なった。大腿神経は腸骨窩血腫により膨隆した腸骨筋とその筋膜で絞扼されていた。腸骨筋は腸骨内板より骨膜とも完全に剝離せられていた。大腿神経損傷は、axonotmesisであった。今後この疾患には、CTが有用な補助診断法となりうると思われる。